BVCC-37435

LIVING STEREO

SUPER AUDIO CD

BRASS & PERCUSSION
MORTON GOULD

SOUSA • GOLDMAN • GOULD

SACD＜Super Audio CD＞について

SACDはCDの開発者であるソニーとフィリップスがCDで培ったノウハウと最先端の技術を結集、共同開発した新世代のオーディオディスクです。音楽の感動を余すところなく伝えるために、録音周波数帯域を100kHzまでも拡張し、ダイナミックレンジもまた120dB以上（可聴帯域内）と大幅に拡げました。その結果自然界に存在する音のほとんどすべてをそのまま捉えることが可能になりました。SACDでは、信号の記録再生変換行程が非常にシンプルで、従来のPCM方式とは異なった、新しい記録方式が開発・採用されています。それはDSD（Direct Stream Digital）と呼ばれ、音の鮮度をほぼそのまま保つ事が出来ます。ですから、音楽信号はもちろん、演奏会場の空気感までをも忠実に再現する事が出来るのです。

DSD＜Direct Stream Digital＞について

従来のCDなどに用いられているPCM方式では、音楽のアナログ信号をデジタル信号に変換、記録する際にある瞬間毎の数字化が必要でした。また、再生時にも何倍かの短い時間毎に数値を読み出しそれを元の波形に組み立てる作業が必要でした。DSD方式では、アナログ音楽信号をデルタシグマ変調器で高速の1ビットのデジタル信号に変換し、この信号を直接記録するものです。つまり従来の64倍もの細かさで信号の波を、パルスの疎密波として記録していく単純な方法です。再生時にも複雑な波形再構築の作業が無くシンプルに自然な音楽信号が再現できるのです。それは、あたかも空気の疎密波である音楽信号波形をそのまま写し取ったような記録方法なのです。このアナログ信号に近いデジタル記録方式が音楽の空気感までも伝えることができる秘密なのです。

株式会社BMGファンハウス
http://www.bmgjapan.com

SUPER AUDIO CD **and** DSD Direct Stream Digital **are Trademarks.**

＜オンライン・アンケートのお願い＞　http://www.bmgQA.com　この商品の感想を専用ホームページへお寄せください。今後の商品リリースの大切な資料とさせていただきますので、ご協力をお願い申し上げます。なお、お答えいただいた方の中から抽選で素敵なプレゼントをお送りします。詳細は専用ホームページをご覧ください。

リビング・ステレオ最高の名録音の一つとして知られる当アルバムは、作曲家、編曲者、指揮者とマルチな活躍で知られたモートン・グールドによる代表的名演である。ニューヨークのオーケストラ奏者やポピュラー・ミュージックもしくはジャズ・バンドの主力奏者、フリーランスのスタジオ・ミュージシャンらを集めたヴィルトゥオーソ・シンフォニック・バンドの華麗・多彩な演奏ぶりを余すところなく収録している。そのアンサンブルの見事さと、ソロ・パートの巧みさにかけては、いまだにこのアルバムを抜く演奏はないといっても過言ではない。CDリリース時よりも収録曲1曲増加。

解説：S.スペース、R.A.サイモン

4 988017 630327

05・3・23
(05・1・11)
Ⓨ⊗

このSACDを、著作権法で認められている権利者の許諾を得ずに、①賃貸業に使用すること、②個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、③ネットワーク等を通じてこのSACDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。

COMPACT disc DIGITAL AUDIO

RCA RED SEAL

BMG

株式会社 BMGファンハウス
http://www.bmgjapan.com
Made in Japan

SUPER AUDIO CD

BMG

星条旗よ永遠なれ ～ブラス&パーカッションの饗宴

M・グールド

SUPER AUDIO CD

HYBRID

RCA

BVCC 37435

LIVING STEREO

リビング・ステレオSACDハイブリッド 20

リビング・ステレオ最初期ながら、今でも色褪せない名録音として知られる、鬼才M・グールド最高の名盤。

星条旗よ永遠なれ ～ブラス&パーカッションの饗宴

モートン・グールド（指揮） ヒズ・シンフォニック・バンド

SUPER AUDIO CD

DSD Direct Stream Digital

HYBRID

SACDハイブリッド盤
CDプレーヤーで再生可能

BVCC-37435 STEREO/ADD
〈吹奏楽（ブラスバンド）〉

RCA RED SEAL

定価 ¥2,100
（税抜価格¥2,000）㊐05・9・22まで

アメリカ初出盤LP（LSC-2308）のジャケット。

ジョン・フィリップ・スーザ
John Philip Sousa *(1854-1932)*

1 星条旗よ永遠なれ [3:35]
The Stars and Stripes Forever

モートン・グールド
Morton Gould *(1913-1996)*

2 パレード（パーカッションのために） [2:12]
Parade (for percussion)

スーザ
J.P.Sousa

3 オン・パレード [2:45]
On Parade

4 忠誠 [3:10]
Semper Fidelis

エドウィン・フランコ・ゴールドマン
Edwin Franko Goldman *(1878-1956)*

5 ジュビリー [2:33]
Jubilee

M.グールド
M.Gould

6 7月4日（独立記念日） [2:24]
Fourth of July

スーザ
J.P.Sousa

7 海を渡る握手 [1:41]
Hands Across the Sea

M.グールド
M.Gould

8 リパブリック賛歌 [3:24]
Battle Hymn (Based on Steffe: Battle Hymn of the Republic)

エドウィン・E・バグリー
Edwin E. Bagley *(1857-1922)*

9 国民の象徴 [2:05]
National Emblem

ゴールドマン
E.F.Goldman

10 木陰の散歩道 [3:08]
On the Mall

スーザ
J.P.Sousa

11 雷神 [2:14]
The Thunderer

グールド
M.Gould

12 アメリカン・ユース・マーチ [2:26]
American Youth March

ゴールドマン
E.F.Goldman

13 自由の鐘 [2:33]
The Chimes of Liberty

14 ハッピー・ゴー・ラッキー [2:17]
Happy Go Lucky

スーザ
J.P.Sousa

15 ワシントン・ポスト [2:28]
Washington Post

16 闘技士 [2:02]
The Gladiator

17 エル・カピタン [2:20]
El Capitan

18 アメリカ野砲隊マーチ [2:32]
The U.S. Field Artillery March

ダニエル・エメット [M.グールド編]
Daniel Emmett *(1815-1904)* [Arr.: Morton Gould]

19 ディキシー [2:48]
Dixie

スーザ
J.P.Sousa

20 士官候補生 [1:55]
The High School Cadets

21 サウンド・オフ [2:15]
Sound Off

22 コーコランの候補生 [2:26]
The Corcoran Cadets March

フランク・W・ミーチャム [M.グールド編]
Frank W. Meacham *(1856-1909)* [Arr.: Morton Gould]

23 アメリカン・パトロール [2:40]
American Patrol

M.グールド編
Traditional [Arr.: Morton Gould]

24 ヤンキー・ドゥードゥル [2:43]
Yankee Doodle

スーザ
J.P.Sousa

25 マンハッタン・ビーチ [2:11]
Manhattan Beach

26 国民防衛軍マーチ [2:36]
National Fencibles March

M.グールド
M.Gould

27 ジェリコ [12:23]
Jericho

Total Playing Time : 【78:04】

ジョン・バーク（コルネット）（3 4）
John Burke, *cornet*

モートン・グールド指揮 ヒズ・シンフォニック・バンド
Morton Gould *(conductor) and* **His Symphonic Band**

録音：1956年10月17日、19日、26日（1-17）、
1959年1月22日&23日（18-27）、ニューヨーク、マンハッタン・センター

オリジナル・マスター：2トラック（1-17）&3トラック（18-27）・レコーディング
SACDマルチ・モードでは、フロント・レフト、ライト・チャンネル（1-17）、およびフロント・レフト、センター、ライト・チャンネル（18-27）で再生されます。
DSD Mastering DSD Mastering from original two track (1-17) & three track (18-27) stereo recordings at Soundmirror, Inc.
SACD Multi: 1-17 2 channel (front left, right channel) 18-27 3 channel (front left, center, right channel)
SACD Stereo **CD Audio: ADD/ Stereo**

リビング・ステレオのSACDハイブリッド化にあたってのテクニカル・ノート

ジョン・ニュートン
（マスタリング・スーパーヴァイザー、サウンドミラー社）

録音という行為が行なわれるようになった最初期のころから、録音エンジニアは、実際に耳で聞こえる音にできるだけ近い、迫力のある音で録音されるように努力を重ねてきた。最初期の電気録音では、ホールやスタジオ内の最適の位置に置かれた1本のマイクロフォンで収録され、そのマイクロフォンが拾った信号は、そのままディスク・カッティング・マシンに供給された。テープ録音が可能になったことで、供給先はモノラルのテープレコーダーとなり、そのテープのコピーから、家庭で一般人が聴くLPレコードがカッティングされるようになった。

ステレオ技術の開発により、ホール内には2本のマイクロフォンが置かれるようになった。信号はステレオ・テープコーダーに送られ、家庭でも2本のスピーカーで再生することが可能になり、音に深みが出た。ホール内にマイクロフォンを右、中央、左と3本置くことによって、最終的に2チャンネル・ステレオにミックスする時に、音楽的なバランスをより自由自在にコントロールできるようになった。CDがLPに取って代わっても、基本的には同じような手段が採られた。

今日、SACDおよびマルチ・チャンネル時代の到来によって、家庭でもオリジナル録音時にエンジニアが聴いたのと全く同じクオリティ・バランスで、ライト、センター、レフト・チャンネルの音を正確に再生することができるようになった。今回のリビング・ステレオ・シリーズのSACDハイブリッド化にあたっては、可能な限りオリジナルの3トラック・テープを用いた。もちろん、もともとオリジナル・テープが2トラックで録音されているものに関しては、それを使用している（RCAによる3トラック録音がオーケストラ録音において恒常化するのは1956年以降のことだからである）。

そういうわけで、今回発売される10タイトルのうち、オリジナルが3トラック録音のものは、SACDマルチでは3チャンネルのまま、そしてSACDステレオとCD層では2チャンネルにミックスダウンしたもの、と3種類のサウンドをお聴きいただくことができるようになっている。またオリジナルが2トラック録音のものはSACD層、CD層ともにその2チャンネルだけをお聴きいただくわけである。つまり、SACDディスクで活用できる6つのチャンネルのうち、3つもしくは2つのチャンネルしか活用していないわけだが、これは、余計な手を加えず、あくまでもオリジナル・マスターの純粋な音を、当時のプロデューサーとエンジニアが録音したままにお聴きいただくためなのである。

オリジナル・テープのリマスタリングにあたっては、再生デッキから録音デッキまでの距離をできるだけ短くした。つまり介在物を可能な限り少なくしたのである。スチューダー製の

Ariaというアナログ・テープ・レコーダーがプレミアム・ジルテック・ケーブルと直接つながれ、特別に設計されたdCSコンバーターに供給される。そしてこのDSDデータは直接SACDにエンコードされるのである。それゆえ、われわれがスタジオで聴くのと寸分違わない音を家庭で再生することが可能になったのである。DSDデータはまさにアナログ・テープと同一のものといってよい。この小さなディスクに刻みこまれているのは、まさに歴史的な価値を持つ録音を、クオリティを全く落とすことなく家庭で再生できるよう寸分違わず忠実にコピーしたものなのである。これらオリジナル・テープのクオリティの高さ、保存状態の良さゆえに、フィルターを通すなどして音を調整する必要など全く感じなかった。

このプロジェクトを進めていく過程で、私はまるで歴史が蘇ってくるような体験をした。ルイス・レイトンやジョン・クロフォードなど、今や鬼籍に入って長い伝説的なエンジニアたちが、テープの最初や終わりに、そのテープがいつどこで、どのセッションで録音されたかを、自分の声で吹きこんでいるのだが、それらの声を聴くと、その演奏が録音された時と場所へ、タイムスリップする思いがした。それに、オリジナル・テープの編集点の少ないこと！ その編集点も、当時の「ハイテク」機器であるカミソリを使って何と巧妙に編集されていることであろう！ 21世紀最高のマスタリング技術を使用することで、20世紀の最高の録音技術を新しい世代の聴衆にも伝えることができるのは、この企画に関わる者として何よりの喜びである。

ジョン・ニュートンは、ドルビー研究所とヴァンガード・レコードでエンジニアとして働いた後、1972年にボストンを拠点としてサウンドミラー社を設立、クラシック音楽を中心とするアコースティック音楽のデジタル録音、編集、マスタリングを手がけ始める。タングルウッド・ミュージック・センターで技術部門のヘッドを15年間務め、デジタル録音のパイオニアであるサウンドストリーム社とも提携した。フィリップスとの関係も深く、長年エンジニアとして録音制作に関わるだけでなく、2年間録音部門の責任者を務めたこともあり、現在はフィリップスのSACDフォーマットをアメリカで推進している。

ブラスとパーカッションの饗宴
ジグマンド・スペース

いわゆるブラス・バンドが持つ表現力を存分に発揮させたアルバムを、それもマーチの演奏によって世に送り出す。その編曲と指揮を担当するのがモートン・グールドというのは当然のなりゆきでもあろう。他ならぬ彼自身が作曲家として、さらには優れた手腕と個性を発揮するアレンジャーとして、この手の大衆性の高い演目を盛んに手がけてきた人物である。黎明期の立役者ジョン・フィリップ・スーザが基礎を固め、やがてエドウィン・フランコ・ゴールドマン[註1]によって発展を見たユニークな音楽ジャンルに、グールドは心から敬意を払ってきた。後者のバンドに対して若い頃から協力を惜しまず、後には作品の委嘱や客演指揮をこなすまでになったのも、彼が吹奏楽作品へ抱く関心の賜物なのだ。

「ブラス・バンド」の成り立ちは非常にアメリカ的である。その歴史は、「ヤンキー・ドゥードル」が勝利の行進曲として演奏されていた独立戦争の昔にまでさかのぼる。ほとんどあらゆる市町村が地元のバンドを抱えており、それが夏の夕方ともなれば広場や公園で音楽を奏で、パレードや公式行事のたびに華やかな制服に身を包んで行進していたのだ。今日ではハイスクールや大学に欠かせない存在となり、共同体的な理念の獲得において同様の役割を担うに至っている。

ブラスとパーカッションは古式ゆかしきアメリカのバンドを支える精神的支柱にも等しく、今なお際立った存在感を示す楽器である。吹奏楽の本領ともいえる金管の輝かしい音色と打楽器の刻むリズムが、このアルバムではかつてないほど鮮明にとらえられている。望むべき効果を得る手段をモートン・グールドは熟知しており、ハイ・フィデリティを実現した最新の録音技術がそれを補ったのだ。

収録曲の大半が「マーチ王」の異名をとるスーザの作品で占められているのも当然のなりゆきといえよう。モートン・グールドと、彼のもとに結集した辣腕音楽家集団の手にかかれば、これらのマーチも隅々まで当世風のサウンドを身にまとい、永遠の生命を謳歌するかのごとく鳴りわたる。スーザの音楽が持つ品格と推進力を十分に引き出した演奏は、音響としての完成度と、パレードやステージ・ドリルの場で体験できるマーチング・バンドの臨場感を兼ね備えたものだ。

定位置よろしく冒頭を飾るのは「星条旗よ永遠なれ」。これは今やアメリカ合衆国の第2の国歌として認められている。「オン・パレード」はスーザのマーチでも比較的知名度の低いものだが、1888年に作曲され、後にアメリカ海兵隊バンドの公式マーチに採用された「忠誠」は彼の最高傑作のひとつ。同様に広く知られた「ワシントン・ポスト」や「雷神」は1889年の所産だ。「闘技士」は作曲者にとって最初のヒット作となった記念碑的存在で、スーザの自伝

"Marching Along" には「音楽の世界に私の居場所を与えてくれた行進曲」と記されている。「エル・カピタン」はもともと同名のオペレッタ（デウルフ・ホッパーのために筆をとった1896年の作品）の中で用いられた［註2］。かたや「海を渡る握手」（1899）は、ヨーロッパへの演奏旅行を前にして筆がとられたもの。

スーザと並ぶにふさわしい作品としては、まずE. E.バグリーの「国民の象徴」に指を屈するところだ。これは1906年に出版され、マーチの定番として今日もなお不動の地位を保っている。その主題はしばしば野卑な歌詞をつけて、"おお、猿が旗竿に尻尾を巻きつけた（Oh, the monkey wrapped his tail around the flagpole)" と口ずさまれたりもする。エドウィン・フランコ・ゴールドマンが名を連ねるのは彼の代表作「木陰の散歩道」。自らのバンドを率いてニューヨークのセントラル・パークで開催し、大評判を呼んでいた演奏会のために書き上げた曲である。他にもゴールドマンらしさが伝わるものとして、「自由の鐘」「ジュビリー」「ハッピー・ゴー・ラッキー」が収録されている。

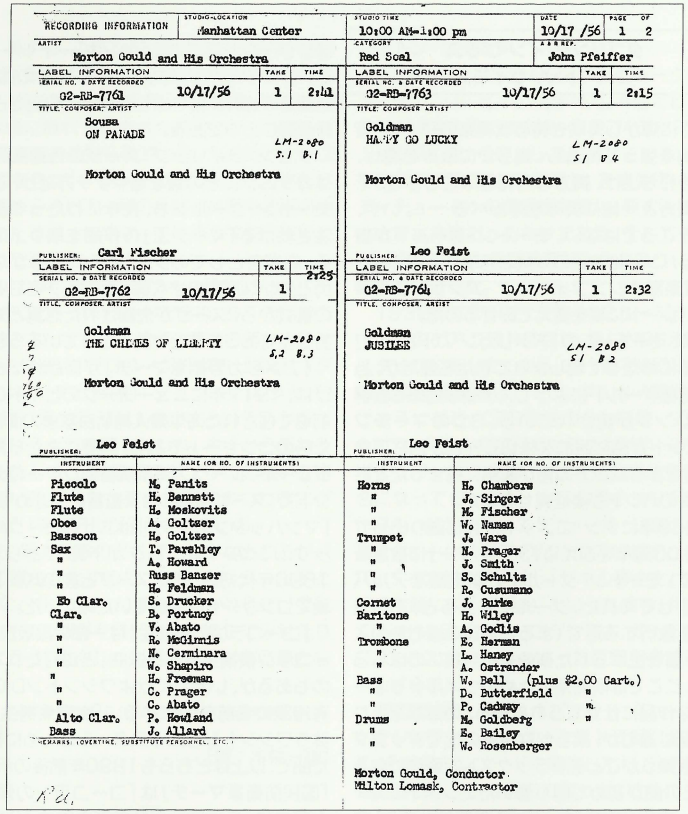
この栄えある1枚に加わるべく、モートン・グールドも作品を寄せた。打楽器のみの編成による「パレード」と、快活な「アメリカン・ユース・マーチ」という2つの気のきいた小品に加えて、彼自身が "どんちゃん騒ぎ" と呼ぶ「7月4日」。これは文字どおり独立記念日をタイトルに掲げるにふさわしく、花火の音を効果的に模してみせる。そしてウィリアム・ステッフェが書いたおなじみの旋律に基づく「リパブリック賛歌」に至っては、この曲にジュリア・ウォード・ハウが付した歌詞を無言のうちにかみしめるかのごとく、音楽に宿る崇高な魂をグールドは見事に描き出していくのだ。

［以上はアメリカ初出盤LP（LM-2080）の解説を翻訳したものである］

訳注1●ジョン・フィリップ・スーザは1880年から1892年までアメリカ海兵隊バンド（1798年創設）の」指揮者をつとめ、その後は自らの名を冠したバンドを率いて活躍。エドウィン・フランコ・ゴールドマン（1878-1956）は1911年にニューヨーク・ミリタリー・バンドを結成（1918年にゴールドマン・バンドと改名）。新作委嘱や優れた指揮者の招聘を通じてアメリカ吹奏楽界の隆盛に大きな足跡を残した。

2●デウルフ・ホッパー（William DeWolf Hopper, 1858－1935）はアメリカの俳優。その子息DeWolf Hopper Jr.（1915-1970）も俳優として活躍した。

［訳：木幡一誠］



RECORDING INFORMATION — STUDIO-LOCATION: Manhattan Center — STUDIO TIME: 10:00 AM-1:00 pm — DATE: 10/17/56 — PAGE 1 OF 2

ARTIST: Morton Gould and His Orchestra — CATEGORY: Red Seal — A & R REP.: John Pfeiffer

LABEL INFORMATION	SERIAL NO. & DATE RECORDED	TAKE	TIME	TITLE, COMPOSER, ARTIST
	02-RD-7761 10/17/56	1	2:11	Sousa ON PARADE LM-2080 S.1 B.1 Morton Gould and His Orchestra
	02-RD-7763 10/17/56	1	2:15	Goldman HAPPY GO LUCKY LM-2080 S1 B4 Morton Gould and His Orchestra
	02-RD-7762 10/17/56	1	2:25	Goldman THE CHIMES OF LIBERTY LM-2080 S.2 B.3 Morton Gould and His Orchestra
	02-RD-7764 10/17/56	1	2:32	Goldman JUBILEE LM-2080 S1 B2 Morton Gould and His Orchestra

PUBLISHER: Carl Fischer — PUBLISHER: Leo Feist — PUBLISHER: Leo Feist — PUBLISHER: Leo Feist

INSTRUMENT	NAME (OR NO. OF INSTRUMENTS)
Piccolo	M. Panitz
Flute	H. Bennett
Flute	H. Moskovits
Oboe	A. Goltzer
Bassoon	H. Goltzer
Sax	T. Parshley
"	A. Howard
"	Russ Banzer
"	H. Feldman
Eb Clar.	S. Drucker
Clar.	B. Portnoy
"	V. Abato
"	R. Medinnis
"	N. Cerminara
"	W. Shapiro
"	H. Freeman
"	C. Prager
"	C. Abato
Alto Clar.	P. Rowland
Bass	J. Allard

REMARKS: (OVERTIME, SUBSTITUTE PERSONNEL, ETC.)

INSTRUMENT	NAME (OR NO. OF INSTRUMENTS)
Horns	H. Chambers
"	J. Singer
"	M. Fischer
"	W. Naman
Trumpet	J. Ware
"	N. Prager
"	J. Smith
"	S. Schultz
"	R. Cusumano
Cornet	J. Burke
Baritone	H. Wiley
"	A. Godlis
Trombone	E. Herman
"	L. Haney
"	A. Ostrander
Bass	W. Bell (plus $2.00 Cart.)
"	D. Butterfield "
"	P. Cadway "
Drums	M. Goldberg "
"	E. Bailey
"	W. Rosenberger

Morton Gould, Conductor
Milton Lomask, Contractor

1956年10月17日、ニューヨーク、マンハッタン・センターで行われた録音のセッション・シート。
アルバムには明記されなかった「ヒズ・シンフォニック・バンド」のメンバーがわかる。

ダブリング・イン・ブラス
ロバート・A・サイモン

ここに輝かしく咲き誇る吹奏楽の花……、音楽は胸を張って行進し、高らかに歌声を発し、花火を打ち上げ、貴方の口元をほころばせ、そして貴方と一緒に笑みを浮かべる……。いや、それどころではない。モートン・グールドが指揮するバンドは作品の本質を見事にとらえながら、軍楽隊やシンフォニック・アンサンブルや街のパレードに姿を変えてみせるのだ。

F.W.ミーチャムの「アメリカン・パトロール」は長年にわたって親しまれてきた名曲だが、当録音ではグールドによってステレオ効果も抜群のアレンジが施されている。3つのマーチング・バンドが順に眼前を横切る光景が目に浮かぶ。前を歩むバンドの音が次第に弱まったところで次のバンドが姿を見せるのだ。

1859年にダン・エメットが世に送り出してから100周年を迎える「ディキシー」に敬意を評して、モートン・グールドが編曲版をアルバムに寄せてくれた。グールドによると、この名旋律を敷衍する形で（まるで刺繍を編むかのように）書き上げられた楽曲も相当数にのぼるらしい。ここでは吹奏楽のためのヴィルトゥオーゾ的な作品に仕立てられている。果敢な足どりで音楽は進むが、柔らかな革底の靴でタップダンスを舞うがごときリラックスした瞬間になると、この曲が初めて鳴り響いたミンストレル・ショーの舞台を彷彿とさせる雰囲気も漂う。やはりグールド編による「ヤンキー・ドゥードル」は、シンプルだが趣向もこらした変奏曲。彼が吹奏楽の世界に送り出して定番の位置を占めた作品のひとつである。

ジョン・フィリップ・スーザの行進曲の録音はカタログにその数を増やす一方だが、ここでモートン・グールドも、長年にわたって敬愛を注ぎ続ける「マーチ王」の作品を取り上げている。指揮者としてのグールドは、大らかな生命力と豊かな旋律の才を備えたマーチを彩る細部の書式から、スーザが洗練された感覚と知性の持ち主であったことを読みとっているらしい。

「アメリカ野砲隊マーチ」が書かれたきっかけは、1917年にニューヨークのヒポドローム劇場で催された海軍婦人補助部隊求人情報局のためのコンサートである。演奏にあたったのはグレート・レークス海軍演習センターの大隊バンドで、スーザはその音楽監督をつとめていた。「マンハッタン・ビーチ」はニューヨークのブルックリンの一郭からタイトルがとられた。1890年代初頭から、スーザと彼のバンドは同地でコンサートを開いていたのだった。

「コーコランの候補生」は一部の出版譜で「コーコラン候補生分列行進曲」と銘打たれてるものもあるが、いずれにせよワシントンD.C.の教育施設に名前を由来する。「士官候補生」もやはりワシントンのハイスクールのために書かれた曲で、以上はどちらも1890年前後の所産だ。「国民防衛軍マーチ」は「コーコランの候補生」と同様に、行進隊列が防御形をなす“分列行進曲”に属する。ここで用いられた“防衛軍”という用語（訳注：Fencible、元々はイギリスで18〜19世紀に組織された「義勇軍」をさす言葉）は既に廃れてしまったかもしれないが、しかし音楽はよく知られている。1880年代半ばに完成を見た「サウンド・オフ」は、このアルバムに収められたスーザの作品では最も初期の産物にあたるが、他のマーチに劣らず気のきいた足どりで進んでいく。

1941年に書かれたグールドの「ジェリコ」は、今やスクール・バンドを含め、多くの団体の愛奏曲となっている。全体は8つの部分に分かれ、そこに彼は「プロローグ」「点呼」「詠唱」「ダンス」「マーチと戦闘」「ジョシュアのラッパ」「壁が崩れ落ちる」「ハレルヤ」というストーリー性をはらんだ表題を付した。古くから伝わる旋律もひとつ、旧約聖書のジェリコの戦いを勝利に導いたジョシュアの伝説にまつわるニグロ・スピリチュアルが引用されている。

さあ、貴方の家のどこでも好きなところがバンドの舞台と化すのだ。モートン・グールドと彼のバンドは、貴方に演奏を聴かせるだけでなく、ときには部屋を横切って行進してみせたりするだろう。生々しくも目に鮮やかな音楽として！

［以上はアメリカ初出盤LP（LSC-2308）の解説を翻訳したものである］

［訳：木幡一誠］

モートン・グールド

1913年の12月10日、ニューヨーク州のリッチモンド・ヒルに生まれた。4歳でピアノの公開演奏と作曲を試み、6歳で「ジャスト・シックス」というワルツを出版している。そして8歳でピアノ演奏を放送し、音楽芸術インスティテュートへの奨学金を得た。要するに、彼は大変な神童だったわけである。そして13歳で、2年間で終わる音楽理論と作曲のコースを終えてしまった。

1932年にラジオ・シティ・ミュージック・ホールのピアニストになり、後にNBC放送のスタッフに転じた。さらに21歳でWOR放送の指揮者・編曲者として、レギュラー番組を持つようになり、CBS放送のクレスタ・ブランカ・プログラムの指揮者も務めた。グールドのポピュラーな作品は、放送を通じて次第に有名になって行ったが、演奏会用のシリアスな作品も、例えばバレエ「フォール・リヴァー伝説」、「オーケストラのためのスピリチュアルズ」、「インタープレイ」、「ジキル博士とハイド氏の主題による変奏曲」といった曲も、ストコフスキー、ライナー、ロジンスキ、ミトロプーロス、トスカニーニといった巨匠指揮者に採り上げられた。

第2次世界大戦後はポピュラー・ミュージックをシンフォニック・オーケストラ用に編曲して、それらをレコードに録音したり、また楽譜を出版したりして有名になった。さらに指揮者としてそれらを演奏録音したり、クラシック

音楽の指揮者としてもシカゴ響、アメリカ響、ロンドン響、読売日響などに客演、自作を含む幅広いレパートリーを持っていた。1996年2月21日、フロリダ州オーランドで没。

モートン・グールドの率いる、シンフォニック・バンドの演奏する「ブラス・アンド・パーカッション」というアルバムは、モノーラルのLP時代からベスト・セラーを記録した、シンフォニック・バンドの名盤であった。この中の数曲はシングル盤にカットされて、学校の体育大会や運動会で、盛んに行進の伴奏に使われていた。ハイファイ録音で音質が良く、しかも編曲が実にスマートで、行進していても凄く格好が良かった。フレデリック・フェネルの率いる、イーストマン・ウィンド・アンサンブルのLPが発売される、数年前のことだったのである。

グールド自身このアルバムに収められているオリジナルのほか、組曲「セント・ローレンス」、交響曲「ウェスト・ポイント」、狂詩曲「ジェリコ」といった、シンフォニック・バンドのための曲を数多く書いている。またバンドにも理解が深く、以前CBS時代にも同様のアルバムを出していた。だがこのRCAのための録音は、全米の一流オーケストラやポピュラー・ミュージックやジャズ・バンドの主力奏者、さらにフリー・ランスのスタジオ・ミュージシャンなどを集めて、臨時に編成した特別仕立ての名人集団を指揮している。そのアンサンブルの見事さと、ソロ・パートの巧みさにかけては、いまだにこのアルバムを抜く演奏はないほどである。スーザを始めゴールドマン、グールド自作のオリジナルなど、アメリカのマーチを27曲も収録したアルバムは、前代未聞といっていいだろう。

（出谷 啓）

Recorded: October 17, 19 and 26, 1956 (1-17), January 22 and 23, 1959 (18-27), Manhattan Center, New York City

Produced by John Pfeiffer / Recording Engineer: Lewis Layton
Mastering Engineer: Mark Donahue / DSD Engineer: Dirk Sobotka
Remastering Supervisor: John Newton / Reissue Producer: Daniel Guss
Series Coordination: Tim Schumacher

Design: Red Herring Design / Photography: Sara Foldenauer

First Release:
1-17: LM/LSC-2080 (March 1957, titled "Brass and Percussion")
18-27: LSC/LM-2308 (August 1959, titled "Doubling Brass")

〈取り扱い上のご注意〉
●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ケースを破損しないように、ディスクは中心の凸部を押しながら静かに取り出して下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。
〈保管上のご注意〉
●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

MANHATTAN CENTER — JANUARY 23, 1959 10AM-1PM

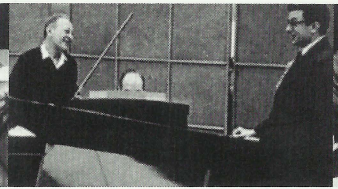
MORTON GOULD AND HIS ORCHESTRA

CONTRACTOR	JOSEPH FABBRONI
FLUTE	JULIUS BAKER
"	LOIS SCHAEFER
*	MURRAY PANITZ
OBOE	ROBERT BLOOM
"	HARRY SHULMAN
CLARINET	BERNARD PORTNOY
"	NAPOLEONE CERMINARA
"	ROBERT MCGINNIS
"	DAVID WEBER
"	ERNEST BRIGHT
"	AUGUSTINE DUQUES
"	CHARLES RUSSO
"	DON LITUCHY
"	HAROLD FREEMAN
"	HERBERT TICHMAN
"	PAUL HOWLAND
E-FLAT CLARINET	SIGURD BOCKMAN
BASS CLARINET	ALDO SIMONELLI
BASSOON	HAROLD GOLTZER
"	LOREN GLICKMAN
ALTO SAX.	VINCENT J. ABATO
" "	TEDDY GOMPER
TENOR SAX.	IRVIN HORROWITZ
BARITONE	MORRIS BRATMAN
HORN	JAMES CHAMBERS
"	JOSEPH SINGER
"	BORIS RYBKA
"	RALPH BROWN
TRUMPET	TED WEIS
"	CARMINE FORNAROTTO
"	STEFAN SCHULTZ
CORNET	JOHN WARE
"	JACK HOLLAND
"	ROBERT NAGEL
TROMBONE	ERWIN PRICE
"	JAMES THOMPSON
"	LEE MYRON MARGULIES
BARITONE	HUNTER WILEY
"	ABE PEARLSTEIN
"	AL GODLIS
TUBA	WILLIAM BELL
"	HARVEY PHILLIPS
"	HERBERT WEKSELBLATT
"	JOHN BARBER
TIMPANI	ELAYNE J. KAUFMAN
PERCUSSION	GEORGE GASER
"	WALTER ROSENBERGER
"	ELDEN C. BAILEY
LIBRARIAN	JAMES DOLAN

* W-4 FORMS ATTACHED

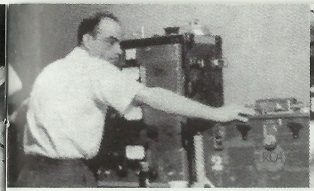
1959年1月23日、ニューヨーク、マンハッタン・センターで行われた録音のメンバー表。
1956年のセッションと共通するメンバーも多い。

プレイバックを聴くリチャード・モア、ミュンシュ、ロスアンヘルス（1955年、ボストン）**

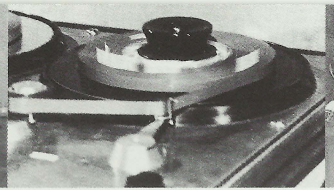


レコーディング・セッションでのハイフェッツ、スミスとプロデューサーのジョン・ファイファー（1965年、ハリウッド）**

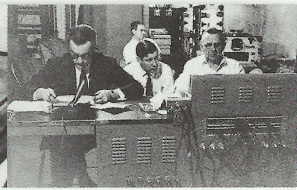
プレイバックを聴くモアとモントゥー（1952年、ボストン）**



録音機材の前のエンジニア、アンソニー・サルヴァトーレ（1955年、シカゴ）**



アンペックス社製3トラック・テープ・レコーダー300-3（1958年）*



オーケストラ・ホールの地下に設置されたコントロール・ルームでのモアとレイトン（1959年）*

LPからSACDへ、時代を超えて生き続ける、不滅の「リビング・ステレオ」

ステレオ録音が実用化した1950年代半ばから1960年代初頭にかけては、各レコード会社がこの新しく画期的な技術を用いて数多くのレコードを次々と生み出した時期でもあった。アメリカのRCAは、イギリスのDECCAやアメリカのMERCURYとともに、ステレオ録音の開発と発展に最も積極的に関わり、成果をあげたレコード会社である。

RCAは1953年10月のニューヨーク、マンハッタン・センターにおけるストコフスキー指揮のセッションでステレオ録音（「バイノーラル録音」）の実験を開始し、いくつかのセッションでの試行錯誤を経て、1954年3月、シカゴ、オーケストラ・ホールにおけるライナー指揮シカゴ交響楽団のセッションにおいてステレオの実用化にこぎつけたのである。これはイギリスのDECCAやEMIがジュネーヴやアビーロードでステレオ録音を行う2ヶ月前のことだった。

当時、一般家庭での再生システムはまだモノラルであったが、ステレオ技術にこそレコードの将来性を感じたRCAは積極的に2トラックおよび3トラック録音を推進した。ライナー、ミュンシュ、モントゥー、ルービンシュタイン、ハイフェッツ、フィードラーなどの名演奏家たちの決定的な解釈が、すば抜けた鮮度と立体感を誇る音質によって次々と録音されていったのである。1955年にはステレオ・テープデッキが市販化され、RCAはこれらの録音をステレオ・テープという形でまず発売した。

ようやく1958年になってウエスタン・エレクトリック社によりステレオLPレコードの技術が開発された。同じ年、RCAはついに念願のステレオLPレコードを発売、「ハイファイ・ステレオ」の黄金時代の幕開けを告げたのである。

「リビング・ステレオ」とは、この時期にRCAが発売したステレオ・レコードに付けられていたロゴで、いわば「生き生きとした、生演奏のようなステレオ」という意味であり、左右のスピーカー・コーンの間にLIVING STEREOの文字が踊るデザインは、LSC-で始まる4桁のカタログ番号とともに優秀録音の代名詞でもあった。RCAのチーフ・エンジニア、ルイス・レイトンを中心に試行錯誤を経て考え抜かれたセッティングにより、ノイマンU-47やM-49/50などのマイクロフォンとRT-21（2トラック）やアンペックス社製300-3（3トラック）といったテープデッキで収録されたサウンドは、半世紀近く経た現在でも、バランス、透明感、空間性など、あらゆる点で超優秀録音として高く評価されている。

こうしたRCAの遺産を引き継いだBMGクラシックスは、CDというメディアが成熟期を迎えた1993年から、「リビング・ステレオ」のレーベルで、1954年から1960年代半ばまでに録音された、質・録音ともに特に優れた演奏を厳選してCD化しはじめる。当時のステレオ録音の多くを担当した名プロデューサー、ジョン・ファイファー自らが監修を引き受け、彼は出来るかぎりオリジナル・マスター（LPのプロダクション・マスターやコピーではなく、オリジナルのセッション録音テープを切り貼りして編集された原テープ）にさかのぼり、経年変化による傷や磁性体のはがれ等を徹底的に修復してから再生し、デジタル化した。この「リビング・ステレオ」シリーズのCDは、復刻CDとしてはこれまでとは次元の違うクオリティを実現させ、音楽ファンの間で高い評価を得た。

「リビング・ステレオ」のCDシリーズから10年。その間、技術開発と向上によって、再生やマスタリングの精度は驚くほどの進歩を見せた。そして、2004年。「リビング・ステレオ」がSACDハイブリッドで登場する。

今回のSACDハイブリッド化は、「リビング・ステレオ」シリーズを新しい高品位メディアであるSACDで復活させるもので、既発売のデジタル・ソースは使用せず、わざわざオリジナル・マスターテープにさかのぼって新たにDSDマスタリングされている。SACDが復刻メディアとして選ばれたのは、CDを遥かに上回る情報量による高品位な再生音を実現できることに加えて、リビング・ステレオ最盛期の3チャンネル収録をそのまま家庭で再生できるからである。つまり、SACDマルチ・チャンネルでは、3トラック・オリジナル・マスターを2チャンネルにミックスダウンすることなくそのまま再現することができるのである。また、SACDステレオおよびCD層の2チャンネルへのミックスダウンの過程でも、特注のミキサーを使用して、細心の注意を払ってミキシングが行われている。そのCD層も、DSDデータから直接デジタル化されており、通常のCDプレーヤーで再生しても、「リビング・ステレオ」シリーズも含め従来の復刻CDの枠を遥かに上回る、より鮮明で透明度の高い再生音をお楽しみいただけるのである。この一連のDSDマスタリングにあたってはノイズ・リダクションやフィルタリングなど余計な手は一切加えず（加える必要もなく）、まさにマスターテープ・クオリティの音が家庭で手軽に再現できるようになったのである。

このDSDマスタリングの監修はジョン・ニュートン。ニュートンは、ボストンに本拠を置くサウンドミラー社の創立者にして、デジタル録音・マスタリングの巨匠的存在であり、数々のレコード・レーベルのエンジニアリング、マスタリングを手がけている。フィリップス社のSACD開発にも深く関わり、アメリカでSACDを推進する第1人者である。彼の監修のもと、同社のメイン・エンジニアであるマーク・ドナヒューが実際のマスタリングを手がけている。

「リビング・ステレオ」。それは名演奏・名録音の代名詞であり、「世界遺産」ともいうべき貴重な名盤を21世紀に語り継ぐために、BMGクラシックスが威信をかけて送り出す究極の復刻盤シリーズなのである。

* Photo: Michael Gray Collection
**Photo: BMG Photo Archive